

ここでの「葉にくせありて節ある」は、星川清親先生がイネで次のように解説された現象である（「図説イネの生長」、1975）。

葉身の先端から数 cm 基部寄りの部分は、少しくびれたようになっていて、ここでは葉脈も直線的でなく若干屈曲している。これは若い葉が発達するさい一つ下位の葉の葉身と葉鞘の境でしめつけられて生ずるものと考えられていて、イネに限らずムギ類その他イネ科の葉身に共通に認められる特性である。

つまり酔吟子氏によれば、「ヨシの若茎の 3 枚目以上の葉身を探って“くびれ”を観察する。“くびれ”が 1 ヲ所なら出水は 1 回，“くびれ”の程度が強いと激甚、さらに葉身を 6 等分して、基部から 4～9 月にあて、それぞれを 3 分して上・中・下旬とし，“くびれ”の位置で出水の時期を予知する。」ことになる。2022 年春に千葉県北西部の川岸で 7 本の若茎の葉で“くびれ”の位置を測定したところ、出水の予測時期は「6 月中旬から 7 月下旬（旧暦）」まで分散した（図-4）。「この方法は当たる」とは言い難いようである。

この植物の「悪し：アシ」の側面はやはり雑草となる場合で、「原色 雑草の診断（草薙得一、1986）」では「水路雑

草」として「全国の池沼、河川敷、用水路等の低湿地にふつうに見られ（中略）、休耕田など 3 年以上不耕起にするとヨシの群落に変わる。（中略）休耕田への侵入は用水路、畦畔などの周辺に生えているヨシの地下茎の伸長による場合が多い。（後略）」で、「新版・日本原色雑草図鑑（沼田真・吉沢長人、1978）」では「・・川岸や水湿地に広く群生するが、水田にもはえる。」とある。水田の中では、しばしば畦畔沿いなどに発生する（図-5）ものの、今のところイネの栽培期間中に有効な除草剤はない。「地下茎から出る芽は太く硬く、ビニールや塩化ビニール製の畦畔板もつき破る。（原色雑草の診断）」が、農地のみでなく道路のアスファルトも突き破る（図-6）。ヨシが繁茂した休耕田を復田する場合には、東日本大震災での原発被災水田を対象にした「除染後水田のヨシ防除対策」が農研機構から公開されている（https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/reed_control_in_CRPs.pdf）。

この植物は人の都合でアシ・ヨシと使い分けられたが、フランスの哲学者ブレイズ・パスカルの格言「人間は考える葦である」では、今でも「ヨシ」ではなく「アシ」と読むのは、人間の性悪説を維持しているのであろうか。

田畑の草種

藺・井（イ）

イグサ科イグサ属の多年草。全国に分布し、農耕地周辺の湿地、溜池や水田の畦、湿った空き地などに生育するが、乾燥にもよく耐える。草丈は環境によって異なり 40cm 程度から 1m を超えるものもある。茎は根茎として匍匐し節間は短い。葉は退化してほとんどなく、茎の基部で小さな葉鞘となる。茎は円柱形で、茎の先に花序をつけるが、その先に茎と同じような苞を付けるため花序が茎の途中についているように見える。花序は短い柄の先に多数つき、花序は淡緑色で目立たないがよく見ると花被片は 6 個で先が尖り、ユリなどの花と似ている。

「イ」というのが標準和名で、日本で一番短い植物名であるが「イ」だけでは分かりにくいこともあり「イグサ」と呼ばれることが多い。因みに、一番長い和名は海藻のアマモの別名の「りゅうぐう おとひめ もとゆい き はす龍宮の乙姫の元結の切り外し」で 21 文字になる。

日本の伝統的床材である畳は、表面の畳表と芯になる畳床で構成され、畳表には普通イグサが用いられる。畳は縄文時代にその端があるとされ、当初はマコモやアシなどを平織した筵のようなものであったようである。「畳」は畳めるものの意であり、古くは古事記にも畳の記述がみられるが、現存する最古の畳としてその表にイグサが用いられたのは正倉院に残る「しょうのたたみ御床畳」と呼ばれる畳で、今とほぼ同様の造りであった。この畳は、聖武天皇が使用していたとされる畳で、天皇は木製の台（御床）の上にこの畳を敷いてベッドとして利用していたようである。

その後、中世、近世、近代と現在のような形になり、一部の上流階級で使用されていただけであったものが、江戸時代中期

（公財）日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

以降には一般庶民にも畳が普及してきた。

イグサを畳表に用いるには、丈が 1m ほどで、また、途中で花序が付きそこで折れたり切れたりしやすいことから、栽培用品種として丈が 1.5m ほどもあり花が付きにくい「コヒゲ」が用いられている。

イグサは多くの変種や亜種に分類され、世界の温帯に広く分布している。ヨーロッパではビクトリア朝時代にイグサを使っていた記録がある。当時活躍していたシェイクスピアの戯曲「じゃじゃ馬ならし」の一場面に新婚の主人が花嫁を連れて帰宅する場面がある。その主人の言葉。「夕飯の準備はできているか、家は片付いているか、床にはイグサを撒いて蜘蛛の巣は払ってあるか」。床にイグサを撒くのはイギリスの古い習慣であったようで、女王、国王の謁見時や宮殿内の各部屋、民家の床にも撒かれていたそうである。今でいう赤絨毯の代わりであった。

